様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １１ 日現在

機関番号：３２６７９
研究種目：若手研究
研究期間：2019～2022
課題番号：１９Ｋ１２９９５

研究課題名（和文）パリ・オペラ座におけるバレエ伴奏者の職業化と楽器の変遷(1807-1939)

研究課題名（英文）The professionalization of ballet accompanists and the change of instruments at the Paris Opera House (1807-1939)

研究代表者
阪田　玉藻（永井玉藻）（Sakata-Nagai, Tamamo）

武蔵野音楽大学・音楽学部・講師

研究者番号：８０８３６９４０

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,600,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、1807年から1939年までの1世紀以上にわたる期間に、パリ・オペラ座でバレエの稽古伴奏に従事した人物の詳細と、その分析を通して、バレエ伴奏者の業務内容に関する変遷の過程と、その変遷に関わ る社会的・美学的要因を解明することを目的とした。 今回の研究成果としては、論文を3本、学会口頭発表を2回行い、研究の総括として単著を1冊上梓した。この単著については、新聞を含むメディア報道が6本あり、発売4ヶ月で重版が決定した。また、ウェブメディアで課題に関連する連載を2021年から行なっている（現在までに連載回数24回）。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究課題は、従来の芸術学研究の枠組みを大きく超えた学際的な視点から、これまでは研究対象として周縁的な位置付けにあった劇場の「裏方」に着目した点と、その「裏方」に属するバレエ伴奏者の歴史を明らかにした点に、最大の学術的意義があるといえる。また、研究の総括として上梓した単著は、音楽・舞踊芸術分野のみならず、フランス文学や社会学など他分野の研究者、また一般の読者を含む幅広い層から支持を得ており、発売開始から4ヶ月で重版が決定した。

研究成果の概要（英文）：This study examined the detailed information of individuals who were involved in ballet rehearsal accompaniment at the Paris Opera House for over a century, from 1807 to 1939. The aim was to elucidate the process of changes in the roles and responsibilities of ballet accompanists and the societal and aesthetic factors involved in these transitions through analysis. As a result of this research, three papers were published, two oral presentations were given at academic conferences, and a monograph summarizing the research was authored. The monograph received media coverage, including an article in newspapers, and a second edition was decided within four months of its release. Additionally, a series of articles related to the research topic has been published on web media since 2021, with a total of 24 instalments as of the present.

研究分野：美学および芸術論関連（音楽論）

キーワード：バレエ　パリ・オペラ座　伴奏者　歴史　フランス　芸術文化

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

昨今、オペラ劇場における演奏活動の歴史的実態については、歴史学と文化社会学の交差を踏まえた多くの重要な研究成果が生まれている。音楽学領域においても、これまでに多く見られた歌手などの演奏者や劇場運営全般に関する研究に留まらず、公演の制作過程で行われていた稽古の全容や稽古に必要な人員といった、舞台作品の創造過程により近い側面が考慮されるようになった。パリ・オペラ座（以下、オペラ座）に関しては、その文化的・社会的影響力の大きさからこの30年間で著しく研究が進み、F.パチュロ著『パリ社会におけるガルニエ宮 1875-1914』（Patureau 1991）、A. テリエール著『1669 年から今日までのパリ・オペラ座オーケストラ』（Terrier 2003）、S.セール著『パリ・オペラ座 1749-1790 啓蒙時代の文化政策』（Serre 2011）、M.オクレール、C.グリスティ編『パリ・オペラ座バレエ団 ルイ 14 世からの覇権の 3 世紀』（Auclair and Ghristi dir. 2013）などが出版された。

これらの成果が発表されるようになった背景として、作品の上演はオペラ劇場における活動の一部分に過ぎず、大半の時間は日々の稽古などの準備に費やされる、という事実への注目と、劇場の物的・人的資源の状況もまた、作品上演に関する制度や美的規範の変革と密接に関連していることへの評価が挙げられる。本研究は、この演奏活動の歴史的実態に関する研究の傾向をさらに推し進めるものである。

２．研究の目的

本研究の目的は、1807 年から 1939 年までの 1 世紀以上にわたる期間に、オペラ座でバレエの稽古伴奏に従事した人物の詳細と彼らが使用した伴奏者用譜面の情報をデータベース化し、そのデータ分析を通して、バレエ伴奏者の業務内容に関する変遷の過程と、その変遷に関わる社会的・美学的要因を解明することである。

対象期間とした 1807 年から 1939 年のうち、1850～1919 年までの伴奏者の人物像に関しては、これまでの申請者の研究により詳細がほぼ明らかになっている。しかし、オペラ座は 19 世紀初頭から、フランスのみならずヨーロッパ各国のバレエ界に対しバレエの伝承と普及において圧倒的な影響力を持っており、また 20 世紀初頭から半ばにかけては、バレエ・リュスの登場による影響でオペラ座を含むパリのバレエ界は激しい変化にさらされた。この全ての期間を含む包括的な形でのバレエ伴奏者に関する研究は、未だなされていない。

そこで本研究では、調査対象期間をこれまでに扱った期間の前後に広げ、フランス国立文書館およびフランス国立図書館分館のオペラ座図書館に所蔵されているバレエ伴奏者に関する史料の記述内容を分析し、バレエ伴奏者の経歴、労働条件や給与額といった、職務に関する諸条件を解明する。さらに、データベース化によって明示される諸条件、とりわけ伴奏に使用される楽器および演奏を担う人物の移行が、フランスにおけるバレエ音楽・バレエの社会的地位の向上とどのように関連を持つのかを明らかにする。

３．研究の方法

本研究課題では、ナポレオン 1 世の勅令によってオペラ座がバレエ上演の特権的地位を得た 1807 年から、1914 年以降オペラ座総裁としてバレエ上演の改革に取り組んだジャック・ルーシェが辞職した 1939 年までの 132 年間に、パリ・オペラ座でバレエの稽古伴奏に従事した人物と伴奏者用譜面の調査、データベース化および分析を行う。研究は基本的に申請者が単独で行い、期間は 2019 年 4 月から 2022 年 3 月までとする。史料の撮影は、フランス国立文書館ピエルフィット分館、およびフランス国立図書館分館のオペラ座図書館で行う。データの整理と入力は表計算ソフトウェアの Excel を用いる。史料収集とそのデータ入力に当たっては、対象とする 132 年間を 2 つに分割し、1 年目には 1807～1849 年、2 年目は 1850～1939 年の作業を行う。最終年度にはデータ分析に基づいてバレエ伴奏者の詳細を明らかにし、その結果を音楽社会史的・美学的文脈に位置付ける。

４．研究成果

本研究では、1807 年から 1939 年までの 1 世紀以上にわたる期間に、パリ・オペラ座でバレエの稽古伴奏に従事した人物の詳細と、その分析を通して、バレエ伴奏者の業務内容に関する変遷

の過程と、その変遷に関わ る社会的・美学的要因を解明することを目的とした。 今回の研究成果としては、論文を 3 本、学会口頭発表を 2 回行い、研究の総括として単著を 1 冊上梓した。この単著については、新聞を含むメディア報道が 6 本あり、発売 4 ヶ月で重版が決定した。また、ウェブメディアで課題に関連する連載を 2021 年から行なっている（現在までに連載回数 24 回）。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計4件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 永井玉藻	４．巻 151
２．論文標題 1860年代のパリにおける日本人のバレエ観劇--文久遣欧使節団およびパリ約定使節団の場合--	５．発行年 2023年
３．雑誌名 哲學	６．最初と最後の頁 163-182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井玉藻	４．巻 54
２．論文標題 19 世紀末のパリ・オペラ座における「ピアノのレペティトゥール」：上演レパートリーとの関連から	５．発行年 2023年
３．雑誌名 武蔵野音楽大学研究紀要	６．最初と最後の頁 49 - 67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井玉藻	４．巻 53
２．論文標題 バレエ楽曲における弦楽器独奏――《ジゼル》第2 幕とクレティアン・ユランの場合――	５．発行年 2022年
３．雑誌名 武蔵野音楽大学研究紀要	６．最初と最後の頁 45 - 62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 永井玉藻	４．巻 50
２．論文標題 ミシェル・サン＝レオン著『ダンスの練習帳』―19 世紀前半のクラスレッスン用音楽に見られる特徴―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 武蔵野音楽大学研究紀要	６．最初と最後の頁 25 - 41
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　0件）

1．発表者名 永井玉藻
2．発表標題 19 世紀末のパリ・オペラ座におけるバレエの衰退 ――劇場運営規則および上演レパートリーの変遷から見る背景――
3．学会等名 日本音楽学会第73回全国大会
4．発表年 2022年

1．発表者名 永井玉藻
2．発表標題 バレエの稽古伴奏における楽器の変遷 ――19世紀後半のパリ・オペラ座の場合――
3．学会等名 日本音楽学会第71回全国大会
4．発表年 2020年

〔図書〕　計1件

1．著者名 永井玉藻	4．発行年 2023年
2．出版社 音楽之友社	5．総ページ数 224
3．書名 バレエ伴奏者の歴史 19世紀パリ・オペラ座と現代、舞台裏で働く人々	

〔産業財産権〕

〔その他〕

ウェブメディア「バレエチャンネル」における連載「【マニアックすぎる】パリ・オペラ座ヒストリー」 https://balletchannel.jp/genre/historyofoperadeparis

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関